

# アーティストの表現として見る アートプロジェクトの意義について —東京都立川市における「おやこ・de・アート展」 in 立川の実践を事例に—

成 清 北 斗

桜美林大学芸術文化学群

Significance of Art Project as a Form of Artistic Expression  
: A Case of Practice of Nomad Art in Tachikawa-City

NARIKIYO Hokuto

College of Performing and Visual Arts, J. F. Oberlin University

キーワード：アートプロジェクト、アーティスト、現代アート、  
アール・ブリュット、市民活動

## 1 はじめに

近年、美術館やギャラリー以外の場におけるアート活動である「アートプロジェクト」が数多く実践され、アートの分野に限らず、地域活性や産業振興、社会包摂といった、これまでアートと結びつきづらかったような社会的文脈からも注目を集めている。

アートが社会における多様な接点を持つことは肯定すべきことである一方、アートプロジェクトの意義が理解されないことにより、アートが手段として利用されてしまうのではないかという懸念も生じている。

アートプロジェクトの意義を理解することが難しい理由として、多様な担い手の関与に加えて、過程やアートを取り巻く様々な要素を含めた一連の活動であるということが挙げられる。つまり、アートプロジェクトは、個人の制作者による独立した「モノ」として存在する作品とは異なり、直接体験する以外、目的や性質の異なるそれぞれのプロジェクトの全容には触れられないということである。

しかし、社会にひらかれた表現形態であるアートプロジェクトだからこそ、その意義を

明らかにすることは、アートの可能性をひろげることに限らず、アートとの結びつきを期待する社会的文脈からも必要なことだといえる。

アートプロジェクトの持つ意義は、来場者数や経済効果などの数値に表される成果のみではないことから、筆者は、当事者以外の人々にも本来の意義を伝える方法として、実践者の考えや実践の内容を共有することが有効であると考ええる。

さらに、アートプロジェクトは、アーティストが新たな表現を模索する中で生まれた表現形態であるという背景を踏まえ、アーティストによる表現の延長線上にあるアートプロジェクトの実践事例に着目することが、アートプロジェクトだからこそその意義を明らかにするための手がかりになるだろう。

本稿では、アーティストである筆者が、「アートの場づくり」を新たな表現と捉え実践したアートプロジェクトである「おやこ・de・アート展」in 立川についてふりかえる。

アートプロジェクトとその実践者であるアーティストの意義を明らかにするための手がかりを共有することによって、アートのためのアートプロジェクトでも、社会のためのアートプロジェクトでもない、社会とアートプロジェクトのよりよい関係性を、様々な立場の人々とともに築きあげていくことにつながって欲しいと思う。

本稿は以下のような構成となっている。まず、アートプロジェクトについて概説し、アーティストによる表現の模索と社会的要因からその誕生について述べた後、アートプロジェクトにおけるアーティストの役割について整理する。次に、アーティストによるアートプロジェクトの具体的な事例として、筆者の実践した「おやこ・de・アート展」in 立川をふりかえる。そして、実践者として同プロジェクトを考察し、まとめとする。

## 2 アーティストとアートプロジェクト

### 2-1 アートプロジェクトとは

日本国内では1990年代半ば頃から、従来の作品を中心とする展覧会とは異なる「アートプロジェクト」が数多く取り組まれるようになっていく。

アートプロジェクトとは、従来のような美術館やギャラリーといった場所における作品展示ではなく、アートが特定のまちやコミュニティと関わることによって形成される。そして、その過程に重きを置くため、当然、プロジェクトごとに目的や性質は大きく異なるといえる。

また、アーティストやアートの専門家ではない、自治体や大学、企業、市民団体などがプロジェクトの主催になることや、プロジェクトの多くが何らかの助成を活用していること、あるいは市民ボランティアの関与などから、多様な担い手が存在することも特徴のひとつである。

熊倉純子は、現在日本で展開されるアートプロジェクトを「現代美術を中心に、1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動。作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象と関わりながら展開される。既存の回路とは異なる

る接続／接触のきっかけとなることで、新たな芸術的／社会的文脈を創出する活動といえる。」(熊倉監修 [2014] 9 頁) と定義している。

## 2-2 アートプロジェクトの誕生

アートの歴史の中でアートプロジェクトがどのように誕生したのかということについて、アーティストの表現の模索と、それらを取り巻く社会的要因から見ていきたい。

1960 年代から 1970 年代にかけて、制度からの自由を求めるアーティストたちにより、実験的かつ先端的な表現が追求されていった。しかし、社会の消費的要求がより明確となった 1980 年代以降、アートにもわかりやすさが求められるようになり、実験的な表現は受け入れられなくなった。

1990 年代に入り、全国的に美術館や劇場などの文化施設の建設がひろがりを見せるが、評価の定まっていないアーティストの発表の場は限定されたままであった。そうした中で、従来は自由な発表の場として成立していた自主企画の公募展であるアンデパンダン形式なども時代とともに役割を果たせなくなっていき、アーティストたちはさらなる新たなアートのあり方や表現の場をさがしはじめた。

一方で、同時期に「芸術文化振興基金」<sup>1</sup> や「企業メセナ協議会」<sup>2</sup> の創設など、助成金の仕組みが日本国内で整備されはじめた。また、メセナ活動はバブル崩壊によって、より低予算で支援が可能なアーティスト活動、特に若手アーティストへの支援に注力しはじめたのである。

そのような過程で、一部のアーティストたちは、より自由な空間として美術館やギャラリーといった文化施設ではない場所に着目し、自ら新しいアートと表現の場をつくり出そうとしはじめた。従来のように作品制作をするだけでなく、実社会の中で様々な要素と協働しながらプロジェクトを実現させるといったタイプのアーティストが活躍するようになったのである。

さらに、作品展示場所としてのサイトスペシフィックな表現から、より多様な要素との関わりが生じるコミュニティスペシフィックな表現へと発展していき、現在のアートプロジェクトとよばれる活動が見られるようになってきた。

通常、アーティストの作品制作は、自身のテーマ（何を）、手法（どのように）ということ相互を考えながら行われる。伝統的な表現と一線を画す現代アートでは、手法が限定されるわけではないため、その時々表現したいテーマをもとに手法を選択し、作品を構築していくことが多い。

アートプロジェクトの実践をアーティストの表現として捉える場合、関連する社会的要素はアーティストのテーマ形成と手法選択の両方に影響を与えるものであり、表現のための素材ともなり得るのである。特に現在進行形の社会的要素と密接に関わり合う現代アートの表現として親和性があることから、アートプロジェクトは、アーティストが同時代の表現を模索する中でたどり着いた表現方法のひとつだといえることができる。

### 2-3 アーティストとアートプロジェクトの関係

すでに述べたように、アートプロジェクトの目的や性質、担い手などは実に多様であることから、必要に応じた分類をすることが、個別事例の理解に役立つと考える。

ここでは、アートプロジェクトにおけるアーティストの果たす役割について分類することによって、アーティストの表現としてのアートプロジェクトについて整理したい。

#### A アートプロジェクトを自らの表現の追求とするアーティスト

アーティストは、社会に介入しアート以外の様々な要素と関わりを持ちながら、自らの着想による表現の追求としてプロジェクトを実践していく。マネジメントや助成金獲得を含む資金調達など、現実的に解決しなければならない課題も実践者自らによって乗り越えていく。

#### B アートプロジェクトに作品制作者として参加するアーティスト

主催者が設定した地域振興や教育的地域連携などの目的をアートによって実現しようとするプロジェクトにアーティストが参加する。ディレクターやキュレーターといった役割の人材から、作品の制作者として選出される存在としてのアーティストは、特定の地域や環境を生かした作品制作をする場合も、あくまで各自の作品制作をするという役割から逸脱することはない。

以上のように、アートプロジェクトにおけるアーティストの二つの異なる役割から分類をすることができた。

A の場合、アーティストが、社会に介入し様々な要素と関わりを持つことで新たなアートをつくりだしていくという、アートプロジェクトの軸となる実践に携わっているが、B の場合はそうではない。また、B の場合におけるアーティストは、ディレクターやキュレーターに選ばれることを待つという立場であり、アートプロジェクトに参加しながらも、美術館やギャラリーにおけるグループ展に参加する立場と本質的に変わらない。よって、前述の熊倉の定義に該当するアートプロジェクトを、自らの表現と捉えて実践するアーティストとは、A の役割を果たす存在であるといえる。

次章では、A の役割を果たすアーティストによるアートプロジェクトとして、筆者の実践した「おやこ・de・アート展」in 立川の詳しい内容についてふりかえりたい。

## 3 「おやこ・de・アート展」in 立川について

### 3-1 概要

「おやこ・de・アート展」in 立川は、Nomad Art ノマドアート<sup>3</sup>が主催となり筆者が企画し実践したアートプロジェクトである。地域の子育て複合施設である立川市子ども未来セ

ンター<sup>4</sup>を会場に、同時代のアート作品の展覧会を開催するという内容である。

同プロジェクトは、新たなアートのあり方を模索する筆者によって、一市民として関わりを有する地域を表現のフィールドと捉えることから着想され、組織運営や助成金獲得などの課題を乗り越えながら展開された。

プロジェクトは当初のコンセプトを踏襲しながら実践の中で発展を遂げ、2017年の第一回展覧会に続き、2018年に第二回展覧会、2019年に第三回展覧会、2021年には過去三回の展覧会をふりかえるアーカイブ展が開催され、活動として一つのまとめを迎えた。

ここでは、アーティストの表現としてアートプロジェクトがどのように発展していったのかということについて、それぞれの展覧会内容からふりかえる。

なお、具体的な数値や体制については、本章末の表(表3-1)を参照してほしい。

### 3-2 「おやこ・de・アート展」 in 立川

第一回展覧会は、2017年に開催された。アーティストである筆者が、公の美術館が存在しない立川市において日常空間における市民とアートとの出会いのきっかけを築くために着想したことから、地域の子どもと子育て中の親を主な対象とするひろくひらかれた展覧会を目指した。

地域の文化資源という観点から、近隣の武蔵野美術大学の学生による作品(図3-1)出展に加え、地域ならではの表現としてアーティストと市民が協働して完成させる「未来の多摩を描こう!」というワークショップ(図3-2)を実施した。

大人と子ども、美術館と日常空間など、社会において対立項として考えてしまいがちな要素を混在させることにより、新たな価値観を築くことをねらいとした。



図3-1 作品体験をする来場者



図3-2 ワークショップの様子

### 3-3 「おやこ・de・アート展2018」 in 立川

筆者は、2017年の実践以降も立川市周辺の文化資源をリサーチした結果、任意団体などによる多様なアート活動が展開されていることを知った。そのひとつであるアール・ブリュット立川は、障がい者の社会包摂を目指す、主に障がい者によるアート作品を発表す



る展覧会である。

「アール・ブリュット」とは、フランス人画家のジャン・デュビュッフェが1945年に提唱した概念である。フランス語で「生（キ）の芸術」を意味し、正規教育を受けていない制作者によるアートを指し、ほぼ同義の英語としてアウトサイダーアートがある。

しかし、日本においてアール・ブリュットは障がい者アートという意味で使用されることが多く、アール・ブリュット立川でのことばの使われ方も同様であった。

アール・ブリュットやアウトサイダーアートが社会包摂という視点から注目を集め出したことは、新しいアートの発見やひろがりとしても歓迎すべきことである一方、矛盾を抱えているともいえる。中谷和人は、「能動的な権能をもつのがつねに『イン』（＝非障害者、美術界、西洋）の側であり、『アウト』（＝障害者、非美術界、日本を含む非西洋）は受動的な対象に閉じ込められる」（中谷〔2009〕220－221頁）と、「イン/アウト」の関係性について指摘している。

新しいアートのあり方を模索する中で、アートプロジェクトを展開しはじめた筆者にとって、多様なアートが社会的に認められることを肯定する一方、特定のアートが周縁のそれとして認識されてしまうことを危惧した。

そのため、それら既存の枠組みを解体し、新たな別の枠組みを構築することで状況改善に努めた。具体的には、立川市を含む多摩地域という活動拠点をひとつの枠組みとして、障がいのあるなしなどにとらわれない多様なバックグラウンドを持つアーティストの作品として提示（図3-3）（図3-4）するという方法をとった。その際、アートプロジェクト自体が表現であるという考えのもと、作品展示者として参加するアーティストはあくまで作品の魅力から選抜することで、その他の目的のためにアートが手段化されるということに陥らないように心がけた。

来場者には、障がいのあるなしといった違いを全面的に紹介するのではなく、あくまで作品に関心を持ってもらった上で、その作者であるアーティストにも思いを巡らせてもらうことで、「イン/アウト」を超越した多様性の共生を目指した。



図3-3 作品鑑賞をする来場者



図3-4 作品体験をする来場者

### 3-4 「おやこ・de・アート展 2019」 in 立川

第三回では、既存の定義を解体し、多様なアートを同一空間で展示することで新たな価値観を築くというこれまでの取り組みをさらに発展させた。現代アートとされるアート、アール・ブリュットとよばれるアート、あるいは固定化されたアートフィールドや表現方法にとらわれないアート（図3-5）、そして、ふだんは自覚的に作品発表をしていない市民によるアート（図3-6）などの様々な作品を展示し、「おとな・こども・障がいのある人・ない人・プロ・アマ」といった枠組みを超えたすべての人々が楽しめる展覧会を目指した。

そして、誰もが表現者になれるというテーマは、制作者や鑑賞者といった、従来のアートとの関わり方を変化させることをねらいとした。それは、アートプロジェクトの担い手となる多様な市民の関与の可能性を提示するという筆者の表現であるともいえる。

市民の関与を促す仕組みづくりの一環として、筆者が同じく立川市内で企画、実施したアートプロジェクト、ツキイチ☆ワークショップ「ワタシ・フラッグをつくろう！」<sup>5</sup>にて制作された参加者作品を展示した。

ツキイチ☆ワークショップの目的は、アートの専門性を有する市民であるアーティストの働きかけによって、すべての子どもたちに向け、豊かな文化芸術の環境づくりをサポートすることである。また、活動を通じ、自然な形で表現することの魅力や、表現の多様性、素晴らしさを伝え、地域全体の文化向上に役立てることである。



図3-5 作品鑑賞をする来場者



図3-6 展示風景

### 3-5 「おやこ・de・アート展 2017-2019 アーカイブ」 in 立川

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、直接体験を前提とする同プロジェクトの継続は困難となった。その際、筆者は、改めてアートおよびアートプロジェクトは時代や社会的要素と密接に関係するものであるということを認識すると同時に、アートプロジェクトとしての表現はどこに向かうべきなのかという問いと向き合うこととなった。

本稿の第一章で述べたように、直接体験する以外、アートプロジェクトの魅力や意義を理解することは難しいという課題がある。特に、アーティストが自らの表現として取り組むようなプロジェクトは、記録としても残りづらく、その意義が第三者に伝わっていると

はいい難く、本プロジェクトも同様であった。

よって、アーカイブを通じこれまでの展覧会をふりかえることで、アートとは何か、表現とは何かということについて、多様な市民と考える機会とすることを目的に開催した。筆者は、これまでの取り組みによって、アートプロジェクトの共創性に対する意識を高めたことから、困難な時代においても持続可能なアートのヒントを多様な市民とともにさぐる試みとなることを目指した。

具体的な内容は、オンラインでの展示と、会場でのパネル展示（図3-7）（図3-8）に加え、プロジェクトの経緯を含む詳細な解説によって、過去のプロジェクトに直接参加したわけではない来場者にも状況が把握しやすいように努めた。また、これまでの来場に限定された体験と比較し、より多くの市民がプロジェクトについて知ることができるようになった。現在は、さらなるプロジェクトへのアクセスツールとして記録集の作成による意義の周知に取り組んでいる。



図3-7 作品鑑賞をする来場者



図3-8 展示風景



表3-1

	第一回	第二回	第三回	アーカイブ
展覧会イメージ				
名称	「おやこ・de・アート展」in 立川	「おやこ・de・アート展 2018」in 立川	「おやこ・de・アート展 2019」in 立川	「おやこ・de・アート展 2017-2019 アーカイブ」in 立川
開催年月日	2017年3月20日～3月26日	2018年3月16日～21日	2019年3月21日～3月24日	2021年6月5日～6月30日
会期	8日間(プレオープン3月19日含む)	6日間	4日間	26日間
会場	立川市子ども未来センター	立川市子ども未来センター	立川市子ども未来センター	立川市子ども未来センター/オンライン
主催	Nomad Art ノマドアート	Nomad Art ノマドアート	Nomad Art ノマドアート	Nomad Art ノマドアート
共催			合人社計画研究所グループ(立川市子ども未来センター指定管理)	合人社計画研究所グループ(立川市子ども未来センター指定管理)
後援	立川市/立川市教育委員会/武蔵野美術大学/立川まんがばーく(立川市子ども未来センター)	立川市/立川市教育委員会/武蔵野美術大学/立川まんがばーく(立川市子ども未来センター)	立川市/立川市教育委員会/武蔵野美術大学/公益財団法人 立川市地域文化振興財団/立川商工会議所/立川観光協会	立川市/立川市教育委員会/武蔵野美術大学/桜美林大学/公益財団法人 立川市地域文化振興財団/立川商工会議所/立川観光協会
協力		アール・ブリュット立川実行委員会/NPO法人 木馬 木馬工房/NPO法人 結の会	社会福祉法人 やまなみ会 やまなみ工房	
助成	公益財団法人 東京市町村自治調査会	立川文化芸術のまちづくり協議会/真如苑	公益財団法人 東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京/立川文化芸術のまちづくり協議会/公益財団法人 東京市町村自治調査会/真如苑	公益財団法人 東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京/立川文化芸術のまちづくり協議会/真如苑
展覧会コピー	カコのこどもとミライのおとなへ	おとなにアソビこどもにセノビ	現代アート・アールブリュット・プロ・アマなんてただの定義/誰もが表現者になれる展覧会	
展覧会テーマ	地域の大学と市民を結び親子で遊べる(体験できる)アートを展示する	多様な表現および表現者を多摩地域との関わりという新たな枠組みから提示する	おとな・こども・障がいのある・なし・プロ・アマなど従来の枠組みにとらわれない多様な表現を通じ、アートや多様性について考えるきっかけにする	アーカイブを通じ、困難な状況においても持続可能なアートのあり方を多様な市民とともに考えるきっかけにする
企画	成清北斗	成清北斗	成清北斗	成清北斗
参加アーティスト	稲垣慎/木村萌絵/鈴木菜緒/鈴木華美/タイウトン/早崎七海/堀川季沙子/正木沙織(すべて武蔵野美術大学学生)	阿山隆之/遠藤良亮/小黒アリス/小坂真一(&ウノアキ)/玉川宗則/ニシハラ☆ノリオ/山本麻璃絵	榎本高士/OTTI/西本喜美子/ノガミカツキ/ノガミカツキ&渡井大己/BIEN/堀内辰男/市民のみなさん「ワタシ・フラッグをつくろう！」	
会期中イベント	成清北斗ワークショップ「未来の多摩を描こう！」(サポーター石黒ゆかり)/オリジナル鑑賞シート/観賞ツアー	成清北斗ワークショップ「花いっぱいの世界をつくろう！」/オリジナル鑑賞シート/観賞ツアー/ニシハラ☆ノリオ&アマメンワークショップ「オリジナル被り物をつくろう」	オープニングパーティー/「山田太郎プロジェクト」パフォーマンス / 西本喜美子等身大パネルとインスタ撮影/OTTI公開制作/ワタシ・パジャワークショップ/アーティストグッズ販売	
その他			関連企画:ツキイチ☆ワークショップ「ワタシ・フラッグをつくろう！」作品展示(独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」)	オンライン展示(会場施設展示の写真/動画/論文)記録集(作成中)
広報	チラシ2,000枚/ポスター100枚/ウェブサイト/SNS	チラシ2,000枚/ウェブサイト/SNS	チラシ3,000枚/ウェブサイト/SNS	チラシ1,500枚/ウェブサイト/SNS
来場者数	延べ600名(鑑賞者計)	延べ500名(鑑賞者計)	延べ1,800名(来館者計)	延べ3,577名(来館者計2,825名/オンライン閲覧者計752名)

## 4 考察まとめ

「おやこ・de・アート展」in 立川は、アーティストである筆者が表現を模索する中、既存のアートという枠組みを乗り越え、社会に介入することによって実現した。

そして、同プロジェクトは、特定の地域や多様な市民に向けたものでありながら、地域活性や社会包摂といった先行する目的実現のためだけに、アートを手段として活用したというものではない。あくまで表現や作品を通じたアートとしての魅力ある展覧会という場づくりを目指していく中で、様々な社会的要素を運びはじめ、やがて市民との共創というテーマにつながるという発展を遂げたのである。

また、同時代を生きる一市民として、社会の様々な要素に関心を持ち関係性を築いていたという筆者の経験が、プロジェクトという表現の発展に影響を与えることになった。

それらは、まさに社会にひらかれた表現としてのアートプロジェクトであるからこそその双方向の発展のかたちであるといえる。

最後に、アーティストの表現としてのアートプロジェクトの意義について述べる。

アーティストの表現には、「モノ」として存在する作品の制作だけではなく、アートプロジェクトという「コト」をつくりだす行為も含まれる。

そして、社会と密接な関係を持ち、新たなアート表現を模索するアーティストによるアートプロジェクトは、何もないところから価値や評価が定まっていなくていいことに対して、信念を持って取り組む表現であるといえ、だからこそ、熊倉のいう「新たな芸術的／社会的文脈を創出する」(熊倉監修[2014] 9頁)可能性を持っているといえる。

アートプロジェクトと社会は不可分であるため、アートプロジェクトを考えることは、社会を考えることでもある。よって、答えのない社会において、既存の定義に様々な疑問を投げかけ新たな価値観を築こうとする行為にこそ、来場者数や経済効果などの数値にはあらわされないアートプロジェクトの意義があるといえるのではないだろうか。

## 5 おわりに

筆者は、複数年にわたるアートプロジェクトの実践を通じて、実践者だからこそ様々な経験を積むことができたと感じている。それらを第三者と共有することは簡単でないかもしれない。ただ、アートやアートプロジェクトの持つ意義や可能性を疑わないからこそ、アートプロジェクトの実践とともに取り組むべきことだと感じているし、その活動自体が、アートプロジェクトにもなり得るかもしれない。

筆者は、新しいアートのあり方を模索するため、今後も様々なアートプロジェクトに取り組んでいきたいと思う。

## 注

- 1 『『芸術文化振興基金』は、すべての国民が芸術文化に親しみ、自らの手で新しい文化を創造するための環境の醸成とその基盤の強化を図る観点から、芸術家及び芸術に関する団体が行う芸術の創造又は普及を図るための活動、その他の文化振興又は普及を図る活動に対する援助を継続的・安定的に行います。』とある。  
独立行政法人 日本芸術文化振興会 HP “芸術文化振興基金の概要”  
<https://www.ntj.jac.go.jp/kikin/about/top.html/> (2021年10月10日最終閲覧)
- 2 「企業メセナ協議会は、企業による芸術文化支援（メセナ）活動の活性化を目的に1990年に設立された、日本で唯一のメセナ専門の中間支援機関です。企業メセナの社会的意義を発信し、文化振興の基盤を整備するために、調査研究、顕彰、助成、情報誌の発行、コンサルティング、国際交流等の事業を多面的に行っています。」とある。公益社団法人企業メセナ協議会 HP “団体概要”  
[https://www.mecenat.or.jp/ja/about\\_mecenat/about\\_mecenat/](https://www.mecenat.or.jp/ja/about_mecenat/about_mecenat/)  
(2021年10月10日最終閲覧)
- 3 Nomad Art ノマドアート 2015年に設立された非営利芸術活動団体。代表：成清北斗。東京都立川市と国分寺市に拠点を置く。Nomad Art ノマドアート HP  
<https://www.nomadart.jp/> (2021年10月10日最終閲覧)
- 4 旧立川市役所跡地を改修し、子育て、教育、市民活動、文化芸術活動を支援するとともに、イベント実施などによって地域のにぎわいを生み出す複合施設。  
立川市子ども未来センター HP “立川市子ども未来センターについて”  
<https://t-mirai.com/about/> (2021年10月10日最終閲覧)
- 5 筆者とスタッフが立川市内の児童館に赴き、子どもたち（未就学児～小学生）を対象に毎月1回造形ワークショップを実施する活動。第1回11/24立川市子ども未来センター / 第2回12/8立川市富士見児童館 / 第3回1/23立川市羽衣児童館 / 第4回2/23立川市幸児童館 / 第5回3/9立川市錦児童館 成清北斗 HP “ツキイチ☆ワークショップ「ワタシ☆フラッグをつくろう！」” <https://www.hokutonarikiyo.com/art-projects/> ツキイチワークショップーワタシフラッグをつくろう / (2021年10月10日最終閲覧)

## 参考文献

- 熊倉純子監修 (2014) 『アートプロジェクト：芸術と共創する社会』（水曜社）
- 熊倉純子ほか編著 (2015) 『日本型アートプロジェクトの歴史と現在 1990年→2012年 補遺』（アーツカウンシル東京）
- 豊原正智、谷悟 (2002) 「“アートプロジェクト”という名の回路：相互触発を生じさせるための構想と実践」（大阪芸術大学紀要『藝術』第25号、88-100頁）
- 中谷和人 (2009) 『『アール・ブリュット / アウトサイダー・アート』をこえて：現代日本における障害のある人の芸術活動から』（『文化人類学』第74巻第2号、215-237頁）
- 成清北斗 (2021) 「市民活動を起点とするアートプロジェクトの可能性：東京都立川市における『おやこ・de・アート展』 in 立川の実践を事例に」（桜美林大学研究紀要『人文学研究』第1号、87-98頁）
- 藤田直哉編著 (2016) 『地域アート：美学 / 制度 / 日本』（堀之内出版）
- 保坂健二郎監修 (2013) 『アール・ブリュット アート 日本』（平凡社）